

第6章 登別

松谷姫那

図 6-1 ニクス城

6.1 登別マリンパークニクス

6.1.1 概要

登別マリンパークニクスは 1988 年に登別市が運営主体となって第 3 セクター会社を立ち上げ、1990 年に開業した。中央にシンボルであるニクス城が置かれており、このモデルは北欧デンマークのイーエスコウ城である。城の内部は巨大な



出所：登別マリンパークニクス HP

水槽があり数多くの魚たちを見ることができる。城の周りには北欧風の建物が並んでおり、お土産やイルカ・アシカ・ペンギンショーなどを行っている。

開業当初は 1990 年に 65 万人の入館者を記録したものの年々減少傾向にある。2000 年は有珠山噴火の風評被害を受け 21 人万強で、累積負債が 10 年間で 50 億円に膨れ上がり経営が壊滅的な状況となったため、2001 年 1 月に登別市は北海道マリンパーク債務整理を決定し、同年 4 月からマリンパークの経営権を加森観光へ譲渡することとなった。その後、展示方法の改善などを行った結果、2002 年度に入場者数の減少に歯止めがかかるようになり、現在に至っている。

登別マリンパークニクスはお城だけあって展示だけではなく雰囲気重視であり、他の水族館よりも少し暗く、内装にも凝っている。ニクス城の両脇にはイルカショーとアシカショーを屋内で行える建物が設置され、ペンギン館からは、キングペンギンたちが、広場に散歩にやってくるなど、ユニークなショーが行われている。

図 6-2 ペンギンの散歩



出所：登別マリンパークニクス HP

6.1.2 マリンパークニクスの施設

6.1.2.1 ニクス城

ニクス城は 4 階建の巨大な魚類展示館、約 400 種、1 万点の生き物を展示している。エントランス

ホールには南海のサンゴ礁のクリスタルタワーがあり、珍しい種類のサンゴ礁の鑑賞が可能である。1 階には大水槽の中のトンネルであるアクアトンネルがあり、寒流・暖流 2 つのトンネルの中では様々な魚類が頭上を回遊し、特に暖流トンネルでは 2002 年 4 月に新登場

した「シリワニ」の迫力ある姿を見ることができる。

6.1.2.2 ペンギン館

ペンギン館はニクス城に隣接し、キングペンギン、イワトビペンギン、ケープペンギン、ジェンツーペンギンの4種類のペンギンを飼育展示している。毎日11時と14時からの2回、キングペンギンがニクス広場を歩く。お客さんの近くを通るので、それぞれ少しずつ違う体格や顔、丈夫そうな足など間近でじっくり見ることができる。

6.1.2.3 陸族館

陸族館は陸地に生息する生物を展示している。体長2mのミズオオトカゲ・特別天然記念物のオオサンショウウオ・甲羅の長さが70cmのアルダブラゾウガメなど陸に生息する約20種類の珍しい爬虫類、両生類などがある。まあ、陸族館にはワシントン条約に違反し、日本に不正に輸入され空港などで没収されたインドホシガメは、各地の動物園・水族館で保護され飼育されている。マリニパークニクスの陸族館でも22頭のインドホシガメを受け入れ飼育しているが、その多くが展示されることなく裏側で飼育され、日の目を見ずにいた。登別マリニパークニクスでは地球上から絶滅の危機にある野生動物との共存と違法な入手および飼育を防止する啓蒙活動を展開している。そして、適正な環境のもと繁殖を成功させ、種の保存に貢献したいというのが飼育係の願いでもある。

6.2 のぼりべつクマ牧場

6.2.1 概要

登別温泉街からロープウェイで約7分、標高550mの四方嶺通称「クマ山」山頂にヒグマの第1牧場・第2牧場の2つの放飼場をはじめ、「人のオリ」、「ユウカラの里」、世界唯一の「ヒグマ博物館」クッタラ湖展望台、リス村などが設置されており、その中で北海道のその中で北海道のエゾヒグマ、ヒグマ、ツキノワグマ、ヒマラヤグマ、エゾリス、エゾタヌキ等の繁殖群を放養する。また、この施設は周囲が支笏洞爺国立公園であるため、野生鳥獣も多くいる。このクマ牧場は、北海道に生息している野生動物の保護と観察、研究のため1958年8月、エゾヒグマの放牧8頭により開設された。世界で初めてヒグマの多頭集団飼育に成功し人工繁殖や冬ごもりの実験等と教育普及にも努める。クマのショー、アヒルの競走などアトラクションも行っている

また、テレビCMは北海道のみの放送だが、その耳に残る台詞回しとインパクトから道民の常識としてマイナーながらもある程度の人気を誇っている。

6.2.2 のぼりべつクマ牧場の施設

6.2.2.1 第1牧場（オス）

ここではオスのヒグマが飼育されている。オスのヒグマはメスのヒグマに比べて、動きは少ないものの、東アジア最大の陸上動物ならではの体格と、毎年 5～7 月は発情期間でそれぞれのクマが頂点を目指して奮闘する「ボス争い」を繰り広げるなど迫力がある。体調の優れない個体は獣医師がクマ山診療所で治療する。

※歴代のボスを紹介する予定（しかし只今ボスは不在）

図 6-3 オスのクマ



出所：のぼりべつクマ牧場 HP

6.2.2.2 人のオリ

ここは第1牧場に併設されているクマを一番近く観察できることである。人間が檻に入っているような造りになっていて、クマたちがその周りを取り囲んでいるので、獲物に狙われ動物のような体験もできる。また、間近で目や耳、鼻や毛並などその特徴をじっくり観察できる。

6.2.2.3 第2牧場（メス）

ここではメスのヒグマを観察することができる。メスのヒグマは非常に活発で、2本足で立ったり、寝そべったり、ひょうきんなポーズでおやつをおねだりしたりすることがある。中には器用なクマもいて、鉄製の木を登り、一番高いところからおやつをおねだりしたりする。ここではクマの動き、器用さ、賢さを観察できる。

表 6-1 歴代のボス紹介

名前	任期	紹介文
初代 タロウ	1964～1965 年	気性が荒く、一匹オオカミとしてあまりに争いが多く、長続きしなかった
2 代目 イシマツ（兄）	1965～1966 年	弟と共にボスとなり、絶大な強さを誇った
3 代目 イシマツ（弟）	1966～1967 年	兄弟で力を合わせるという、ヒトに劣らぬ賢明さを見せた
4 代目 コボス	1967～1969 年	小柄ながら、陰険さによって政権をものにした
5 代目 ゴンタ	1969～1970 年	気が優しくあったせいか、1 年で交替となってしまった
6 代目 ゴンゾウ	1970～1976 年	気が優しいが力持ち。さらに顔もよいという、牧場のボスとしては最高の性格と実力を持ち、7 年という長期に渡り政権を維持した
7 代目 ノロ	1977 年	神経質なところがあり、1 年でやせ細り病気になるってしまった

8代目 ギンタ	1978 年	女王ギンコの子供で、子グマの時から発育良好、気力充分、ボス候補と目されていた
9代目 リキ	1979～1980 年 7 月	やはり女王ギンコの子供で、ギンタとは兄弟であったが、2代目のように協力はせず、それぞれが争ってボスとなった。そのためか、政権は共に短くして終わった
10代目 イッペイ	1980～1982 年 3 月	いつも虎視眈々として不意打ちの機会を狙い、後ろから陰険に争うという戦法でボスになったものの、小競り合いが絶えず、牧場も戦国の世と化した
11代目 モリオ		第2のゴンゾーとささやかれていた。気性は温厚で、自分からは争わないが挑まれれば受けて立ち、実力のほどを見せている。おかげで、牧場にも平和が戻った
12代目 カズヨシ	1989 年 5 月～11 月	血気盛んな多くの若いクマ達に押されつつ、半年間という短い期間であったがよく健闘した
13代目 フミオ		母の鑑と言われるフミの息子で昭和 63 年から 1993 年まで、名ボスゴンゾーに次ぐ長期的政権を維持した。最後までボスとしての気力を持ち続け健気に一生を全うした
14代目 リキタ		1980 年 1 月生まれ。長寿だったウラコ（29 才にて死亡）の息子。1994 年から 1997 年までボスの座を勤め、引退してもしばらくは元気に第一牧場で暮らしていた
15代目 ブッチャー		1980 年 1 月生まれ。1997 年から 1999 年までボスを勤め、就任時最高齢（17 才）記録を持つ。若いときに暴れん坊だったが、ボスを意識する頃には「和」を重んじ第一牧場をまとめ上げた
16代目 マツ	2000～2007 年	歴代ボスの中で座位期間最長を記録。政権交代の 2008 年もボス候補として最後まで争っていた
17&19代目 サチオ		1999 年 5 月 4 日 枝幸町下幌別の道路際で猫に襲われているところを保護される。人工保育などを経て、釧路市動物園へ一時的に保

		護収容。その後、釧路市動物園よりのぼりべつクマ牧場へ保護収容される
18代目 ゲンキ		2001年4月24日 朝5時30分 小雨。愛別町道路上で震えていた所を保護される。その後愛別町役場から旭山動物園へ移動し 2001年5月21日旭山動物園よりのぼりべつクマ牧場へ保護収容される

出所：筆者作成

6.2.2.4 ユーカラの里

クマ牧場のもう一つの顔として存在するのが「ユーカラの里」である。ユーカラの里は失われつつある、アイヌの貴重な文化遺産を保存し、有形無形文化財を後世に伝える為、明治初期の生活様式を忠実に再現している。また、平取町二風谷から文化保存として伝承者が（5～10月まで）常駐している。ユーカラの里内にある生活資料館では、ユリカゴから墓場まで、アイヌ民族の貴重な生活用具を約300点展示している。先住民族アイヌの自然と調和のとれた生活を観察することができる。

1994年8月にアイヌ民族出身者で初の国会議員（参議院議員）となり、またアイヌ語・アイヌ文化伝承者の第一人者であった故・萱野茂博士が、1963年に登別市登別温泉町四方嶺の山頂にあるクマ牧場の隣にアイヌの伝統的な集落を復元再生した「ユーカラの里」は、人事を刷新し再出発を果たした。

萱野茂博士の跡を継いだ「萱野茂二風谷アイヌ資料館」館長・萱野志朗氏が、2006年9月に萱野観光株式会社を設立し、その会社設立を期に「ユーカラの里を活性化するための提言」をいただき、その指導のもと、貝澤貢男さんを新しいコタンコロクル（村長）に迎え、「平取アイヌ文化伝承の里」として再スタートをきった。

貝澤貢男氏は、1965年に萱野茂博士らによって「ユーカラの里」を復元再生した際に、チセ建築に携わるなど、アイヌ文化に関する知識や技術を現代に受け継いでいる希有な人材である。さらに貝澤貢男氏は、イタ（お盆）の彫刻を得意としウロコ彫りの名手でもあり、彫刻については萱野茂博士の弟子に当たる。アイヌの文化伝承は父から子、子から孫へという場合もあるが、どうしても父子は近すぎて難しいこともあることを知っていて、昔から父親はこの人と目した信頼が出来且つ心を許せる人に自分の培ってきた技術や重要な伝承を託し、それをその人を通じてわが子に教えてもらおうと言う。

6.3 鬼伝説

6.3.1 登別温泉と鬼

北海道は数多くの温泉地を抱える国内有数の温泉天国である。その中でも登別温泉は源

泉温度 45℃～90℃で、11 種類の泉質が自然に湧き出る温泉として有名である。登別温泉を代表する名所・地獄谷の煮えたぎる熱湯、立ち上がる噴煙の様子を「鬼も棲む場所」と見たのは現代人ばかりではなく、江戸末期にこの地を「歩むが如く恐ろしい場所」と形容している。温泉街の奥手となる地獄谷入口には赤鬼・青鬼が鎮座し、社に安置している江戸時代に作られた念仏鬼像とともに登別温泉と旅人の安全を見守っている。また、温泉街では湯をかけて無病息災・諸病平癒を願う湯かけ鬼像のほか、恋愛成就、合格祈願、商売繁栄などを願うシンボル鬼像が旅人を歓迎してくれる。また夏の期間だけの「鬼花火」は、厄を集めた湯鬼人たちが豪快に手筒花火の火柱を噴火のように噴き上げて厄払いを行い、迫力満点である。

図 6-4 湯鬼神



出所：登別観光協会 HP

6.3.2 登別地獄まつり

年に一度、地獄の釜のフタが開き、閻魔大王が赤鬼、青鬼を従えて温泉街に現れる。「前触れ太鼓」や迫力満点の「鬼みこし暴れ練り込み」や、形相を変えて地獄の審判を下す「閻魔大王からくり山車」、観光客も一色に踊れる「鬼踊り大群舞」などたくさんの催しで賑わっている。

6.3.3 地獄の谷の鬼花火

鬼花火は登別温泉の集客力あるイベントづくりを目指して 2006 年にスタートした。地獄谷に棲む湯鬼神が人々の幸福を願い、厄を持ち去るために手筒花火を打ち上げる演出で、2009 年は 3 万 4300 人が来場した。湯鬼神が銅鑼の音とともに登場し、愉快的な舞と 10m もの火柱が上がる勇壮な手筒花火を披露する。パフォーマンスが終わったあとは、赤鬼と青鬼が笑顔で撮影に応じてくれる。全国、海外から観覧ツアーが組まれるなど、知名度と集客力が年々上がっている。6 月～8 月の 3 ヶ月間、毎週金・土曜日の午後 8 時 30 分から開催される。

図 6-5 登別伊達時代村



出所：登別伊達時代村 HP

6.4 登別伊達時代村

登別伊達時代村は、かつて東北以北で最大の規模を誇った伊達藩・伊達家にちなんだテーマパークである。当時の町並みを再現したパーク内は、町人から武士、

花魁が行き交う江戸の情景が目の前に広がる。忍者アクションや芸妓の舞などが見られる観劇処、江戸時代の暮らしを実体験できる寺子屋体験学習のほか、庶民の娯楽を展示した見世物小屋では江戸時代の文化、風俗を実際に体験することで、子どもから大人まで楽しむことができる。北海道の大自然に溶け込んだ情緒あふれる街並みに、武士が、忍者が、町人たちが息づき、迫力のアクションや華麗なパフォーマンスに彩られた一大エンターテインメント空間が広がっている。

参照 HP

- ・ 登別クマ牧場
<http://www.bearpark.jp/>
- ・ 登別マリンパークニクス
<http://www.nixe.co.jp/>
- ・ 伊達時代村
<http://edo-trip.jp/>
- ・ 登別観光協会
<http://www.noboribetsu-spa.jp/>